

煌めく星々の備忘録

星乃宮 未玖

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、私達のちよつとした日常の物語。▼小説版バンドリの短編集になります。

目次

欄外の余話、或いは遠い世界の備忘録

休日、ケーキ、星 ————— 1

地上のうさぎは月見て歌う。 ————— 5

煌めく星々の備忘録

すたーびーと! ————— 11

うさぎぱにつく! ————— 23

あめのひうさぎ、ゆうやけうさぎ (上) ————— 31

あめのひうさぎ、ゆうやけうさぎ (下) ————— 38

「もしも」をこえて、いま。 ————— 56

星のない夜。太陽と月は歌う。

欄外の余話、或いは遠い世界の備忘録

休日、ケーキ、星

「有咲〜！ ケーキ買って来たよ〜！」

休日の昼下がりに。練習も無いのでゆつくりしようとしていたところに、玄関の方から響く声。

もう今日はゆつくりは出来そうにない事を悟りつつ、玄関のドアを開けると、そこにいるのは、本人曰く星をモチーフにした髪型をした少女。

「どうしたんだよ。香澄……。ケーキってなんかの記念日なのか？」

そう私が聞けば、香澄は勢いよく頭を振って、屈託のない笑顔を見せる。

「ううん！ でもなんとなく買っちゃった！ でも一人で食べるのにはちよつと大きかったから……」

「で、なんでウチに来るんだよ。家族と食べばいいじゃねーか……」

この香澄の向こう見ずというか、勢いに任せて行動するのに慣れたとはいえ、こう毎度毎度来られるのも困る。いや、少し……ほんの少しだけだが嬉しくはあるのだが、絶対面倒なのでそんな事を口にするつもりもないが。

それはともかく、そう言った私の言葉に、香澄は寂しげな表情を見せる。

「だつて……。お父さんとお母さんは2人だけで旅行だし、あつちゃんもいらないうつて言うし……。皆も用事あるからもう有咲しか居ないの……」

……ああ、もう。やつぱりこいつは狡い。そんな事を言われたら断れないだろう。

「……そーかよ。ならお茶でも淹れてやるから上がれよ」

仕方なくそう言つても、香澄が上がる気配はなく、どうしたのかと振り向けばワナワナと震えら香澄の姿。

「いいの……有咲……?」

「はあ? いいよ別に……。てか、上がらないなら閉めるぞー」

「わー! 待つてよ有咲〜!」

「ちよ……! 香澄! ケーキ崩れるから走るな、そんでくつ付くなー!」

はあ、だから嫌だったんだ。ちよつとでも隙を見せると、こいつはすぐに私の心の中に入り込む。……でも、それを無理に振り解かない自分がいるのも確かで、どうしてもモヤツとする。

——いや、こうして律義にお茶を用意する辺り、私も……つてイヤイヤ、そんな事は無い。無いつたら無い……筈だ。

☆☆

——ジャーン!

その香澄の言葉で開かれたケーキの箱から出て来たのは、小さめだがホールケーキ。確かにこれを一人は辛いなと思いつつ、私はケーキの飾りに目を向けた。

「香澄お前……。絶対飾りで選んだだろ」

「えへへ、バレた?」

「そりゃーな……。これ、いかにもお前が好きそうなデザインだし……」

——それは、星と音符をあしらったデザインのケーキだった。まあ、わざわざ香澄が買ったというのだからそんな気はしていたのだが、私のその言葉に何を思ったのか、香澄は一瞬嬉しそうな顔をした後にニヤニヤとし始める。

「……なんだよ。そんなニヤニヤして」

「いや。やつぱり有咲は私の事よく見てるな〜って」

「バツ! ……いきなり何言うんだよオメーは!」

「あー、有咲、もしかして照れてる〜?」

「照れてねえ! あーもう! 食わねえなら私が全部食べるぞ!」

「あー! 狡いよ、有咲〜! 私も食べるー!」

——はあ、狡いのはどっちだと言うのだ。こうして私の心に入り込む方がよっぽど狡い。

でもしかし、こうして過ごす休日も悪くない。そんな口に出す事は決して無いであろう事を考えつつ、私はケーキを口にした。

地上のうさぎは月見て歌う。

「はあ……。香澄のやつ、やっと寝たか……。まったく、いつまで騒ぐんだっての……」
秋の夜、蔵の地下へと続く階段に座り、虫除けマットを張った蔵の扉から月を見つつ、私は呟く。そして地下にある練習スペースに視線をやれば、そこから少し見えるのは、まるで猫の耳のような髪をした少女——戸山香澄。

そもそも、こいつはいつも強引なのだ。こいつがバンド始めた時もそう。今日だって「お月見パーティをしよう！」なんて無茶振りをするのだ。毎度それに付き合う私達的身にもなつて欲しい。

……まあ、そんな日々も嫌いじゃない自分がある辺り、もう手遅れなのかもしれない。
「……よっし。ねむてーけど、片付けでもすつか」

ぐつと背伸びを一つして、階段を下り、飲み終わったグラスや、お菓子の乗っていたお皿などを纏めつつ、寝てしまったバンドの仲間達に毛布を被せる。香澄、りみ、沙綾……。って、あれ？

「おたえのやつ、何処に行ったんだ？」

おかしい、寝ているメンバーの中におたえが居ない。確かさつき香澄が騒いでいた時

にはいたと思ったのだが、何処に行ったのだろうか。そう思い、蔵の外にある靴を確認するとそこには4対の靴しかない。

「はあ……まったく。なんでこうも私に負担がかかるんだ……」

まあ、とりあえずおたえを探しに行こう。いくらあいつが考えの読めない事をするとはいえ、勝手に自宅まで帰るといふのはないだろうし、香澄が寝たのも十分くらい前なので、そう遠くには行ってない筈だ。

「あ、有咲だ。どうしたの？　こんなところまで？」

「はあ……。おたえ、どっか行くならせめて一言言えよ……。探したんだぞ」

案の定、おたえはすぐ近くの公園の遊具の上に座っていた。その手にはギターを持っている事から、どうやら演奏でもしていたらしい。

こっちが探していた事を知っているのか、いないのか、いつもと変わらぬ調子でいる彼女に呆れた目で答えると、彼女はコテンと首を傾げる。

「？　私、りにちちゃんと出掛けてくるって言ったよ？」

「りにみ？　……あー。そういえば寝る直前になんか言おうとしてたな……」

確かにりにみが寝る直前に、モニャモニャと何か言っていたのは覚えていたが、これの事だったのか。言ってくれば良いのにも思ったが、寝てしまったものは仕方ないだろう。

そして、私の言葉を聞いたおたえは、ちよつと驚いた顔でこちらに振り返る。

「あれ？ りみ寝ちやったの？」

「そうだよ。まあ、りみだけじゃなくて、沙綾と香澄もだけだな。……そんで、片付けしようとしたら、お前がいらないから探しに来たんだよ」

「そっか……。悲しいすれ違いだね。うん」

「いや、お前が皆に言えば済んだ話なんだけどな……」

「……………」

「……なんだよ、その顔」

呆れてつい出てしまった言葉に、おたえは何を思ったのか、目をパチクリさせて身を乗り出すが、私にとっては嫌な予感しかしない。経験上、こういう時のおたえは十中八九突拍子のない事を言うのだ。

「有咲……もしかして、天才？」

ほらやつぱり。もうこのテンポにいちいち突っ込んでいては自分の体がもたないの
で、無視して話を続ける。まあ、我慢出来ずに突っ込んでしまう事もあるが、それが私
なりのおたえとの上手い付き合い方だと思っっている。

「はあ……。もういいや。で、おたえはなんでこんなところでギター弾いているんだ？」

「ん？ ……ほら、あそこ」

その私の問いに、おたえは指を空のある場所に指す事で返す。その先にあるのは、煌々とした月の姿。

「月か？」

「うん。ここつて月がよく見えるでしょ？ だから、ここで歌えば月のうさぎにも届くかなって」

「ふーん……」

そうして再びギターを奏でるおたえを見ると、なんとというか、おたえらしいと思う。こういうロマンチストというか、ファンタジーなのは私のノリじゃないから分からないが、周りに縛られない、独特の世界を持つ人というのは少し凄いと思う。……まあ、それに振り回されるのは勘弁だが。

「ねえ有咲、今のどうだった？」

「ん？ まあ、いいんじゃないの？」

「そっか。……ありがとうね、有咲。探しに来てくれて」

月明かりを背に微笑むおたえの姿は、本当に美しく、そういった趣味がないはずなのに、ついドキリとしてしまう。

「は？ べ、別に大した事じゃねーよ……」

「あ、有咲。もしかして照れてる？ ふふ、可愛い」

「照れてねえ！　そんで可愛いくもねえ！」

ああもう、やつぱりおたえの考える事はよくわからない。なんでそんな恥ずかしい事をあつさり言えるのだ。

そして、それでなぜ、直ぐにまたギターを弾き始められるのだ。彼女のそういうところが本当に狡いと思う。

「あつ……」

「……どうした？」

演奏を聴いてしばらくした頃、不意におたえは上を見上げ、寂しげな声を出す。つられて同じ方向を向けば、そこにあるのは雲に覆われた月の姿。

「……ねえ、有咲。また弾いてもいいのかな？」

「……別に、好きにすればじゃねーの？　お前が届けたいなら、雲に隠れていようが届くんじゃねーの？」

——　だけど、そういう所もきつと、おたえらしさであるのだろう。だから、移りゆく空と違い、彼女には変わらないで欲しいと思う。

誤解されやすい彼女ではあるが、他の誰かがなんと言おうと、少なくとも私は、そういうおたえらしさというのは嫌いではないのだから。

そんな事を考えながら、月明かりの下で行われる二人だけの演奏会。それは、しばらく

くしてやって来た、見回りの人に怒られるまで続いたのだった。

「有咲ってさ、もしかしてロマンチスト？」

「お前に言われたくねーよ……」

煌めく星々の備忘録

すたーびーと！

——ああ、最高だ。

私の通う学校の体育館の壇上に作られたステージの上。閉じた瞳から聞こえてくるのは、響いてくる歓声。

それに応えるように、一息を吸って声のする方向へと目を開く。すると、そこにあるのは体育館いっぱい広がる、沢山の人の姿。

その光景に圧倒されて、少しだけ気後れする。何故なら、その人達が見つめるのは、相棒である星型のギターを持ち、ステージに立っている私なのだから。

その時ふと、昔の記憶が蘇る。それは、大好きだった歌をバカにされて、自分までその好きを否定してしまっていた頃の私の記憶。

……でも、昔のように逃げたりなんかしない。だって、私をムテキにしてくれる相棒がいて。更に私の大切な友達であると同時に、かつて沈んでいた私を此処へ導いてくれた最高の仲間達が側に居てくれるから。そんな皆で紡ぐメロディを、バカになんてさせやしない。

——そんな決意とともに私は彼女達と目を合せて。そうして領き合つてから私はマイクを持つて話し始める。その最中にも、ドキドキとした胸の鼓動は、張り裂けそうな程に鳴り続け、目に映る全てがキラメキに満ちている。

そうだ、彼女達と私が出会い、ここに来るまでの道のりは、決して平坦なものなんかじゃなかった。きっと、全ての始まりは偶然だと思う。

昔の事が原因で最低な毎日送っていた私が、星に導かれた先で出会ったのは、この手に握る相棒と、私達と共に歩き、導いてくれる人。

そして、その出会いからは、きつと全てが必然。夢の蔵で見つけたメロディーに誘われ、バンドをする事になった私が始めたのは共に立つメンバー探し。その最中、このメロディーが出会わせてくれた彼女達や、起きた出来事に怯えたり、緊張したり、驚いたり、涙して悩んだりもした。

——有咲ちゃん。りみちゃん。たえちゃん。沙綾ちゃん。共に立つ彼女達を再び見る。彼女達から返ってくるのは領きのみ。けれど私にとつては、最高のエール。

そう、だからこそ。楽しい時間も、苦しい時間も共に乗り越えて来たからこそ、この場所に、この五人で立てる事が何よりも嬉しくて、一瞬で終わるかもしれないこの時間を大切にしたい。

さあ、そろそろ私の語りも終わり。ここから奏でるのは、遠い過去に置いていかれた、

Yes! Bang Dream! 夢を撃ち抜くメロディー。それを今、蘇らせる。

——さあ！ 最高の音楽キズナを奏でよう！

☆☆☆☆☆

「——つて、夢……？」

ピピピピピ、ピピピピピ。

無機質に鳴り響くちよつと大きめの電子音と、それによって無理やり開かれた視界。そこにあつたのは先程まで見ていた筈のライブの景色ではなく、酷く見慣れた私の部屋の天井で。

いつもと変わらぬ朝の景色であるそれを見て、私は先程まで見ていたものは夢であつたと理解し、ほんの少しの溜息を一つ零す。

「にしても、またあの夢かあ……」

——ここ最近、あの時のライブの時の夢をよく見る。それはきつと、皆と初めて立つたあの舞台を忘れたくないから。

ああ、どうしようか。たつた今日覚めたばかりなのに、先程のあの夢の余韻が、あの熱が、今も心の中に残り続けて燻っている。

そしてその余韻はだんだんと『仮にこの重たい瞼をもう一度閉ざせば、あの夢に戻れ

るかもしれない』などと思わせる程に魅力的な誘惑に変わり、その誘惑は私の中に二度寝の文字を浮かばせる。

「……って、それはダメだよ。今日は練習の日だし、寝坊しちや有咲ちゃんに怒られちやうもん」

だが、それはいけないと首を振って、なんとかその誘惑を打ち払う。もうすぐライブの予定があるし、練習に遅れを出す訳にはいかない。

……けど、ほんのちよつとだけ眠気覚しにギターに触れてもいいかもしれない——。

「……………えっ」

しかし、ギターへと伸ばしたその手は、ギターを手に取ることはなく、代わりに手にしたのは、未だに鳴り続けている、練習開始時間のギリギリを指し示した置き時計。

「あ、あああああ………遅刻だああ！」

そこからの行動は自分でも驚くほど素早かった。顔を洗い、手早くいつも通りに髪を整え、昨夜纏めておいた荷物と相棒を担いで、お姉ちゃん達に「行ってきます！」と言って、その返答を待たずに家を飛び出す。

「はあっ……はあ……急がないと……」

あのライブから半年以上経った、高校二年目の春。いつもの私は、まだ最高には遠いようです。

☆☆☆☆☆

「……で、いきなり蔵に飛び込んで来たって訳ね。かすみん」

「……はい、そうです……」

私達の練習場所である蔵。そこに今いるのは、その主である有咲ちゃんと、その前で座り、項垂れる私のみ。

結論から言うと、私は間に合ったのだ。そう、間に合いはしたのだが――。

「それにしても、びっくりしたわよ。だって、練習始める一時間前に『ごめんなさいいい！』なんて言いながら、かすみんが蔵に飛び込んでくるもの。しかもその原因が、昨日かすみんが遅れないようにって、あえて一時間前にセットした目覚ましに気づかなかつたからって……」

「はい……。バカな私の早とちりでした……。ごめんなさい……」

「いや、誰もそこまで言っていないわよ……。てか、別に怒ってる訳でもないし」

まあ、遅れでもしたら注意もするけど。そう言いつつ、有咲ちゃんはテーブルの上にあるノートパソコンを閉じて、私に立つように促す。

「さ、早く来ちゃったものは仕方ないし、ちよつと早いけど私達だけで練習を始めよつか」

「うん。……あ、でもいいの？ さつきチラッと見えちゃったけど、ゲームしてたんじゃ

？」

「ああ、これ？ 別にゲームしてたんじゃないけど……。んー……。まあ、かすみんなら見せてもいつか」

別にまだ時間あるし。そう言いつつ、有咲ちゃんはテーブルの上のノートパソコンを手に取り、私の方に向ける。その画面の中、ピヨコピヨコと可愛らしく動くその姿は――。

「これ……。私？」

――そう、その姿は、まるで私のような形をしていた。

その画面の中の存在に釘付けに私を見て、有咲ちゃんは少しだけ照れたように頬を染めて話し始める。

「その……さ、かすみんは覚えてる？ 年末にやった映画鑑賞会の事」

年末に行った映画鑑賞会。確かクリスマス前のくらいにりみちゃんが提案したそれは、年末の練習の休みを利用して、皆で好きな映画を持ち寄り、親睦を深めつつ、それを観ながら年越ししようというもの。

その計画は、流石に年を越すのはマズイと言いつつも、そういった事を一度やってみたいと呟いた沙綾ちゃんの一言で年越しとまではいかずとも実行に移されたのだけ――。

「う、うん。覚えてるよ……。でもそれって、確かたえちゃんが……」

そして始まった鑑賞会。私が持ってきた人気恋愛映画、りみちゃんの持ってきた戦国を駆けるニンジャ活劇、沙綾ちゃんの持ってきた温かい家族愛に満ちた物語、有咲ちゃんの某有名なSF物語。それは、途中私が恋愛映画を持って来た事だからかわれるなんて事があつたものの、おおむね平和であつた。……問題が起きたのは、メンバーの中である意味一番真面目で、でもちよつと不器用なたえちゃんの持ってきた映画だつた。

「そう。おたえが持つてくる映画だし安心してたんだけど……」

「で、でも、見応えはあつて私は良かったと思うよ……?」

たえちゃんの持つてきた映画。それはとあるバンドの結成から解散、その後のメンバーの人生を綴つたものだつた。その全編を通して観れば、見応えのある映画であつた。見応えはあつたのだが――。

「そりゃあ、見応えのあるというのは否定しないし、むしろ認める。」

――でも、なんで解散のシーンがあんなにも生々しいのよ」

「そ、それは……」

――そう、バンドの解散のシーン、その内容が生々し過ぎたのだ。

メンバー同士の三角関係。そこが原因となつて起きた音楽の不和。そうして解散に

至って行くその描写が余りにも生々しくて、その時の空気は筆舌に尽くしがたいものだった。

なによりの悲劇は、持ってきた本人であるたえちゃん自身も、私達と楽しもうとして、あえて内容も知らずに買ったというのだ。

「でも、たえちゃんも反省してたし……」

「いや、終わった後に土下座までされたら、ねえ……」

「う、うん……」

そう、むしろ大変だったのはその後の事だった。土下座しながら謝り続けるたえちゃんを励ますのに苦労した。それは、あのりみちちゃんですら自分の持つてきた映画をもう一度観ようとフォローを入れる程だった。

「いや、りみりんは絶対自分のやつもう一度観たかっただけでしょ……。まあ、それは置いといて、それを観て思ったのよ。」

——私達もここまでではないにしろ、いつか似たような事になるんじゃないかって「それは……」

——それは違うよ、なんて言えなかった。だってそれは、私も感じていた事だったから。今はこうしていられる私達。だけど、それはいつまで続くのか、明日にもバラバラになってしまわないか。——きつとその不安が、私にあの文化祭ライブの夢を見させて

いるのかもしれない。

そしてそれは、有咲ちゃんも同じ。いや、もしかしたら私以上に悩んでいたのかもしれない。ポピパが私と有咲ちゃんの二人だけだった頃からずっと有咲ちゃんはポピパの事を考えてくれていた。それは皆知ってるし、有咲ちゃんがポピパの事を一番想っているって皆分かっている。それは、その映画の後にたえちゃんが真っ先に謝っていたのは有咲ちゃんだった事から分かる。

「だからね、何か一つでも私がポピパでいた証が欲しかった。そうやって考えるうちに作ろうと思ったのが、これ」

そう言つて笑いながら有咲ちゃんはパソコンを撫でる。その泣そうになりながら笑う姿が、いつかの私に重なる。なら、私のする事は一つ。

——有咲ちゃん。そう呼びかけて、ギターをケースから取り出し構える。そして奏で、歌うのは、私の始まりと歌いたいという思いを綴った曲。それを歌い終えて、私は有咲ちゃんの手を取り、抱き寄せて指を絡める。

「有咲ちゃん」

「……なによ」

少し涙ぐんだ声がする。だけど有咲ちゃんの顔はあえて見ない。それは、有咲ちゃん

は自分の弱い姿を見せたくないというのを知ってるから。

「私もね、不安だったんだ。いつかポピパがバラバラになっちゃうんじゃないかって」
「……かすみん」

「でもね、それはきつと私や有咲ちゃんだけじゃない。皆が感じているんだと思う。だから皆ポピパを終わらせたくはないって思ってる。——それは有咲ちゃんもそうでしょう。」

首元を感じる熱と、縦に首を振る感覚を感じつつ、有咲ちゃんの作りかけのゲームの画面を見る。あのライブを模したエンディングと思しきシーンの画面にあるのは『END』ではなく『To be continued』の文字。

「だからきつと大丈夫。皆がそう思ってる限り、きつと、いや、絶対に私達は立ち上がって前に進んで行けるから」

その言葉に有咲ちゃんの言葉での返答はない。けれど首元から伝わる感覚はより強くなる。

そうして暫くして『もう大丈夫』と言った有咲ちゃんの顔は涙の跡はあれど、とても晴れやかなものだった。

☆☆☆☆

「改めて、ありがとうね、かすみん。励ましてくれて」

その少し後、涙で濡れた顔を洗って帰って来た有咲ちゃんと、練習の準備をしながら会話する。時間は既に練習開始の二十分前、そろそろ誰か来るかもしれない。

「大丈夫だよ。私も、有咲ちゃんには沢山励ましてもらったもん。これくらい平気、平気」

その私の言葉に、有咲ちゃんは手を止めて、少し遠くを見つめる。

「どうしたの？ 有咲ちゃん？」

「いや、本当にかすみんは強くなったねって」

「え？ そうかな？ 確かにお姉ちゃん達には、明るくなったって言われるけど……」

「うん。ポピパとしてずっといた私が言うだから間違い無し！ ……だからさ、かすみんももっと自信持つて良いんだよ」

「有咲ちゃん……」

その言葉に泣きそうになる私を、今度は有咲ちゃんが宥める。そんな事をしつつ、準備の終盤。有咲ちゃんがノートパソコンを片付ける時に、私はふと気になった。

「そういえば、有咲ちゃん。あのゲームはどうするの？」

「え？ そりゃあ納得いくまで最後まで作るわよ。未完成のままとか絶対許さないし」

それもそうか、有咲ちゃんはゲームが好きだし、きつと妥協したくないのだろう。――

—それに、未完成のまま置いていかれるのは寂しいと知ってるから。

「じゃあさ、そのゲームが出来たらポピパの皆で一緒にやろうよ。有咲ちゃんのポピパへの想いが詰まったそのゲーム」

「その言い方は恥ずかしいけど……。まあ別に良いわよ、でもいつになるか分からないからね。あくまで優先順位はバンドだし」

大丈夫、大丈夫。と言いながら、私は気付く。その事で大事なことを聞いていない。

「有咲ちゃん、今気になったんだけど、そのゲームの名前ってもう決まってるの?」

「名前? あー……。名前ねえ。後でゆっくり考えようって思ってたけど、まだ付けてなかったのよね……。うん、どうせなら今付けようかしら。良い感じに纏まりそうだし」

—そう言ってちよつと考えた後に出された名前。それは先程有咲ちゃんに歌った曲と同じもので、だけど何故かとてもしっくりくる名前だった。

うさぎばにつく！

——全ての始まりは、いくつかの不幸だった。

不幸の始まりは、とある日の事。その日、花園たえは教師から頼まれて、授業で使うとある備品を、保管室のあるフロアまで運ぼうと向かっていた事だった。

「うう……。バランス悪いし、重いっす……。……いや、でも自分が頼まれた訳っすから、他の皆さんに迷惑かける訳には……」

そして、起こった一つ目の不幸。それは、その備品がいくつかの段ボールの中に入れていた事だった。

その積まれた段ボールを見てたえは、大変だが一度に全部運べば楽ではないだろう。そう思った彼女は、用事があり急いでいた事もあって、それを一気に運ぼうとしてしまったのだ。その結果、バランスの悪い積み方となり、階段を上るのにも苦勞してしまつたのだ。これが続けて起きた、二つ目の不幸。

「えっと……。確かこの階っすよね……。……よし、あと一踏ん張り」

三つ目の不幸は、彼女が曲がり角を曲がろうとした際に、バランスを崩さない事に気

を使いすぎて、反対方向から向かって来た、同じように角を曲がろうとする存在に気付かなかった事であった。当然、彼女からしてみれば前は見えないので、その人物を避ける術は無く、

「きやあ!」

「ああつ! 大丈夫つすか!!? ……………よつと。すいません、センパイ。自分が前をよく見て…………なく…………て…………」

そして、そのぶつかってしまった人物こそが最後の不幸。彼女が荷物を置き、その人物に謝罪に向かえば、そこに居たのは彼女もよく知る人物だった。

「し、白鷺…………センパイ…………」

「あいたた…………。もう、たえちゃん? ダメよ、ちゃんと前を見て歩かないと…………」

——白鷺千聖。子役として名を馳せ、今はアイドルバンド「Pastel*Palettes」として活躍している、彼女の通う学校において、その名を知らぬ者は居ないであろう程の有名人。

そんな人物と彼女が何故知り合いになったのか。それは少し前に行われた、とある合同ライブでの事だった。

いくつかのガールズバンドを集めて行われたそのライブ。それに両者の所属するバ

ンドがそれぞれ参加していた事がきっかけとなり、以降こうして顔を見れば世間話する程度には、お互いの距離は縮まっていた。

(びっくりしたけれど……たえちゃんはいいい子だし、注意すれば分かってくれるわよね)
そう、千聖も怒っている訳ではない。短い期間ではあるが、花園たえという人物の人柄を知っているからこそ、一度言えば分かってくれる。そう思い、千聖も軽い注意だけで済ませそうと思っていた。

(……あら?)

しかし、その注意に対し彼女からの返答がない。まさかとは思うが、逃げたという訳ではないだろう。ならば何故。そう思い彼女の方を見てみると――。

「た、たえちゃん……何をやってるの……?」

そこに居たのは、五体全てを地面に伏して、謝罪の意を示している花園たえの姿だった。その姿に混乱する千聖をよそに、彼女はより深く頭を下げる。

「も、申し訳ありませんでしたああ!」

放課後の人の減ってきた学校。そこに、悲痛な叫び声と困惑した声が響いた。

☆☆☆☆

「おたえ遅いわね……。一人で良いって言ってたけど、一体いつまで掛かっているのかしら?」

放課後となり、暫く経った教室にて、市ヶ谷有咲は一人呟いた。その理由は、つい先程に教師に頼み事をされて、席を外した花園たえについて。

彼女は自身の所属する「Poppin, Party」というバンドにおいてキーボードを担当しているのだが、彼女がキーボードというものに触れたのは、彼女がバンドを初めてからであった。

だからこそ、その経験は他のメンバーに比べても少なく、それがコンプレックスになつている部分もあり少しでも練習量を増やす為、時折ではあるが、バンド全体の練習以外にも用事のないメンバーと一緒に放課後の教室などで練習を行っており、今日もそうしようとしていたのだが……。

「はあ……。かすみんは用事で先に帰って、沙綾はまだ手伝い……。りみりんはまた学校に炊飯器持ち込んでお米を売ろうとしたら、それを氷川先輩に見つかって逃走中……。それで手の空いたおたえと練習しようと思えば、この状況……」

そういった理由から今日は二人でしようと言う話になり、たえと始めようとした練習。しかし、その練習も準備中にやって来た教師からの頼まれ事によつて一時中断。直ぐに帰ってくると言つて飛び出して行った件の少女は未だ帰らず、自分はここで一人きり。そんな事考えつつ、彼女は溜息を一つ。

——もう時間だし、おたえが戻ったら練習場所を蔵に変えようかしら。

続けて呟いたその言葉も、誰も居ない教室にただ響くのみ。それに続けて響く溜息が一つ。

（仕方ない。おたえを探しに行きましようか）

そう思い、席を立とうとしたその時に扉の開く音。その音に待ち人かと思い振り向けば、そこにいたのは待ち人ではないが、彼女のよく知る人物。

「あ、有咲ちゃんだ。良かった……ポピパの子まだいた……」

「あれ、彩先輩。どうしたんですか？　ここ、一年の教室ですよ。」

——丸山彩。白鷺千聖と同じく「Pastel*Palettes」に所属する、常に努力で自らの道を切り開いてきた、まさしく努力の人と呼ぶに相応わしい人物。

しかし、有咲としては、ライブで共演したとはいえ、アイドルという立場の違いがある彩とはあまり関わりの薄い人物である。そんな彩が、何故一年生の教室に、しかも自分に用とはなんだろうか。そう思い彼女に「何かあったんですか？」と問えば、返ってきたのは「とりあえず来て欲しい」とという返事だけ。

（仕方ない。おたえにチャットだけしていきましよう。……それにしても、彩先輩の用って本当に何なのかしら）

そう思いつつ、彩に着いて行き、辿り着いた場所に居たのは——。

「千聖ちゃん、有咲ちゃんが居たから来てもらったけど……。まだ落ち着いてないみたいだね」

「ええ……。有咲ちゃん、来てもらってすぐで悪いのだけれど……。たえちゃんを落ち着かせてもらって良いかしら? 私達じゃどうしようもなくて……」

「お、おたえ……。何してるのよ……。?」

そこに居たのは、困ったように有咲を見る千聖と、何故か千聖の前で土下座をしている花園たえが居た。その衝撃につい震えてしまう声で有咲が問いかけると、少し額を赤くしたたえが、ここまでの経緯を説明し始める。それを適度に聞きつつ、有咲は今の状況について思考を巡らせる。

(どうしようかしら……。正直千聖先輩ってちよつと怖いのよね……。何を考えてるか分からないというか……。とにかく、状況は分かたし後は穩便に——)

「あ、ところで有咲ちゃん、たえちゃん。この後って時間あるかしら? よかったら一緒にお茶でもどう?」

——嘘でしょ。

咄嗟に出てしまいそうになったその一言をなんとか飲み込み、有咲は横に立つたえを見る。ようやく落ち着きを取り戻したその顔はその一言で、狩りの標的となったウサギのような表情に戻っている。

(……ダメね、おたえが限界そう)

「千聖先輩、おたえもちよつと疲れてますし、今日はやめにして、また今度都合のいい日に、改めてそれはやりませんか?」

千聖の目を見据える。そこに映るのは疑うような眼差し。それを見て有咲は自身の思惑を悟られている事を理解する。芸能人である千聖が、オフである日がそうそうとあるものではない。そこを有咲は狙ったのだ。無論、それは時間稼ぎに過ぎない。だが、今はたえをこの場から離す事が目的、であればこれが最善手。

そうして数瞬、千聖が口を開く。

「……そうね。ちよつと急ぎ過ぎたかもしれないわね。また今度にしましょう。都合の良い日があれば連絡して貰えるかしら?」

「ええ、分かりました。では、失礼しますね。ほら、おたえ。行くわよ」

「は、はい! ……あの、千聖先輩。本当に申し訳ないです!」

そう言つて去つていく有咲とたえ。その背中を見送り、千聖は側に立つ彩に問いかける。

「……彩ちゃん」

「……な、何? 千聖ちゃん?」

「……私の顔つて怖いのかしら?」

その問いの答えに困った彩が他のメンバーに相談をし、『ホピパと仲良くなろうの会』なるものができるのは、また別のお話。

あめのひうさぎ、ゆうやけうさぎ (上)

「はあ……」

夜も更けてきた金曜日の午後10時過ぎの事。

自室のベッドの上でギターの練習をしていた自分は溜息をつく。そうして俯いた視線の先にある手に握るのは、自分の長年の相棒であるアコースティックギター。

沢山の傷の付いたそれをほんの少し眺め、練習を終えたので仕舞う為に避けるように下から視線を上げれば、そこにあるのは、スタンドに立て掛けられた自分のもう一つの相棒であるエレキギター。

「はあ……」

いつもなら次に手に取り練習する筈のそれを見て、再び溜息が出てしまう。上手く言葉に出来ないのだが、もう今日はギターに触りたくないのだ。

でもそれと同時に、どうしてもこギター子に触りたくなる。その矛盾した気持ちは元々曇った心を更に曇らせて、余計にモチベーションが下がってしまう。

「……………」

ああ、この陰鬱とした気持ちを掻き消すように、何も考える事もせず、ただ自分の感

情の赴くまま、ギターをかき鳴らしたらそれはどれほどの幸せだろうか。でもそんな欲求を抑えきれない自分に反発するように、陰る心はより大きく、より黒くなっていく。

そんな風に混ざり合い、溶けて濁る感情と共に思い出すのは、自分にとって最低とも言える今日の練習の記憶。もうすぐ次のライブを控えた自分達にとって、一回の練習がとても大切な事だというのに、自分はやってしまったのだ。

——むむ？ うさぎ殿、今日は調子が悪いのか？ なんとというか……キレが足りない気がする。無理はしない方がいいぞ。

始まりは、一曲の通しを終えた後のりみセンパイのその言葉……いや、本当の始まりは、自分が自分で納得のできる演奏を出来なくなってしまったからだ。

きつとそのことにりみセンパイは気付いて声を掛けてくれたのだが、不器用な自分はそので皆さんに失望されてしまうのが怖くて、つい「大丈夫つす」と言ってしまったのだ。

——ええ！ たえちゃん、大丈夫なの？ 無理はしちやダメだよ……。

——香澄ちゃんの言う通り、体調が良くないなら無理は禁物だから、休んでもいいんだよ？

それなのに、香澄センパイや沙綾センパイも無理はしなくていいと言ってくれて、けれどその言葉が罪悪感となって自分を余計に苦しめ、その後の練習にも全然身が入らな

くなって、結果的に有咲センパイにも迷惑をかけてしまった。

だって、有咲センパイはポピパが大好きで、ポピパを想う気持ちは痛いほど知ってる。それなのにライブ前の大事な練習を、自分のせいで止めてしまうのが心苦しい。

——おたえ。調子が良くないのは別に構わないし、怒りもしないわ。だけど、無理をして練習をするなら私は怒るわよ。……あなたはウチの大切なメンバーなんだから。

それでも、そんな自分に有咲センパイはそう言っただけで自分を慰めてくれた。

だけど、自分にはその言葉がどうしても自分が迷惑をかけてしまった事を責められている気がして、そのまま帰った後も家でこうしてギターを握りはしたのだが、どうしてか上手くないかない。そしてそうしたモヤモヤが積み重なって、なんていうか、いろいろな事が嫌になってしまう。

——もういつそのこと寝てしまおうか。もしかしたら、ほんのちよつとくらいは楽になるかもしれないし。

眠気と疲労で鈍った頭でぼんやりとそんな事を考えるも、中々動けずにいた自分の耳に着信音が届く。枕元に置いてあるスマホを手にとってみれば、そこには「有咲センパイ」の文字。

「もしもし……？ 有咲センパイ？」

そうして、反射的に通話を始めはしたものの先程の練習の事を思い出してしまい、少

し声が震えてしまう。

——正直な事を言うのと、少し怖い。

先程は慰めてくれたけれど、今はどんな事を言われてしまうのかと、有咲センパイが酷いことを言うはずがないとは思っても、どうしても身構えてしまう。

「ああ、おたえ。今つて時間大丈夫？」

「時間？ ……ええ、大丈夫ですよ？」

「そう？ ……ねえおたえ？ 一ついい？」

「え？ いいつすけど……。なんですか？」

なんだろう。いつもの自信に満ちた有咲センパイと違い、今日はなんとというか歯切れが悪い。それが不安を掻き立てられて、少し泣きそうになる。

そして、暫く考えるような声の後に、有咲センパイは自分に問いかける。

「おたえ……。ギター、練習してたでしょ」

——有咲センパイから投げられたその問いに、自分は答えを返せなかった。

どうして分かったのかとか、それを聞いてどうするのか、聞きたいことはあるのに、いざそれを口にしようとすると、何故か上手く言い表わせず、例えるならりみセンパイがよく言う「ナ・ニモ」状態の香澄センパイみたいになつてしまう。

そうした自分の醜態を暫く有咲センパイは黙つて聞いて、そして溜息と共に遮る。

「はあ……。もういいわよ。別に怒っても、責めるつもりもないんだし。ただちよつと確認したかっただけだから」

「そ、そうなんですか……。でも、それならなんで……。？」

「なんでつて……。おたえが無理をしてないか気になったからよ。あなた、前科があるの忘れたの？」

「ぜ、前科……。？」

前科と言われても、自分には一体何の事か全く分からない。思いだそうとして唸る自分に、有咲センパイはさつきよりも大きな溜息を漏らす。

「……はあ。やっぱりそうだと思った。ねえおたえ、ポピパに入った時のこと覚えてる？」

「え？ それは勿論……。つて、あつ」

有咲センパイの言葉で漸く合点がいった。有咲センパイが言う自分の前科とはつまり――。

「思い出した？ あなたがエレキギターの練習に睡眠を削り過ぎて倒れた事」

自分がポピパの皆さんと演奏する為にエレキギターを極めようとして倒れてしまったことを言っていたのだ。確かにあの時は皆さんと演奏したくて、つい無理をしてしまった。

……でも、それならば問題ない。だって今の自分は、ギターに触れる事も億劫に感じてしまうのだ。一応最低限の練習はしたが、あの時のように無理をしようとも思えない。

……でも、それでも皆さんの力になれないのは凄く辛い。そしてなにより、こんな思考をする自分が嫌になる。

「……大丈夫つすよ。有咲センパイ、だって自分は——」

「いいから。とにかく今は不調を正す事を第一にしなさい。いい？ ポピパにとつてあなたの代わりなんていないんだから。分かった？」

「は、はい……」

——それじゃあおやすみ。もう一度言うけど、無理はしちやダメよ。

その有咲センパイの言葉を最後に、通話の切れてしまったスマホを置いてベッドに倒れこむ。……こうした答えの見えないものを考えるのはなんとというか、疲れてしまう。

「どうすればいいんすかねえ……自分」

そんな事を呟いても、空から答えが返ってくるなんて事は無い。虚空へと伸ばした手は何も掴めず、ベッドに墜ちる。頬を伝う涙は雨にも似て、曇る心は晴れはしない。そしてその雨は、自分の心のギターへの熱を冷ますのだ。

そして、それを取り戻すのは結局のところ、自分がどうにかしなければならぬのは

分かっている。けれど、その道筋がまるで見えず、例えるなら果てしない道を歩いていくかのような、遠い錯覚を覚える。

「ふあ……」

ああ、駄目だ。だんだんと眠気が強くなってきた。いや、むしろ良いのかもしれない。このまま夢に飛び込めたなら、この気持ちも少しは変化してくれるかもしれないから。そう思うと、抗おうとした筈の眠気にどんどん流されて、そうして自分の意識はゆっくり、ゆっくりと薄れていった。

——どうかこの眠りが覚めたら、ギターへの熱が取り戻せますように。
窓から見える星に、そんな事を願いながら。

あめのひうさぎ、ゆうやけうさぎ（下）

——ピリリリ、ピリリリ。

「ふあ……。もう朝つすか……」

スマホのアラームが導いた眠りからの目覚め、それはあまり良くないものでした。自分の心を覆う雲は晴れず、未だに影を落としたまま。……でも、何故なんすかね。

「なにか……。なにか、夢を見ていた気が……」

——そう、夢を見ていた。遠い昔のどこか、懐かしい夢を。

完全に目覚めてしまい、それがどんな内容だったかはもう思い出すことは出来ない。だが、ほんの少しだけだけど気が楽になったから、きつといい夢を見れたのだと思えてくる。

「……よし」

そうして顔を洗い、朝食を食べてから再び相棒のギターを手に取って音を奏でる。

なんとなくだけけれど、今なら弾ける気がするのだ。だから、早く調子を戻してもっと上手くならないといけない。これ以上ポピパの皆さんの迷惑にならない為に——。

「……違う。これじゃ駄目つす……」

でも、すぐに手が止まってしまふ。それは、この演奏では違ふと自分でも思つてしまふから。これでは目指す場所に伸ばした手は届かない。……否、寧ろ伸ばした手が遠ざかつているかのような錯覚までしてしまふ。

ああ、所詮、自分はダメダメなんだつて、つい思つてしまふ。きつと有咲センパイ……いやポピパの皆さんが聞いたら怒るかも知れないけど、そんなダメな自分がポピパの皆さんのような優しい人に出会えただけでも奇跡に近いものなんだと思う。だからせめて、もう自分が足を引つ張らないようにと頑張つても、自分はどうしても迷惑をかけてしまつてゐる。

——ポスリ。そんな音を立てて、ベッドに横たわる。柔らかな感覚に包まれつつ、愛用のうさぎのぬいぐるみを抱き寄せて、今日は何をしようかと考える。……こうして家でゴロゴロするのもいいかもしれないが、それはちよつと不健康な気もする。なによ、今は外の空気を吸いたいのだ。

「よし……」

とりあえず外に出る準備をしながら、とにかく外に出たかっただけなので、何処に行きたいとかはあまり考えてなかつたので、何処に行こうかと考える。

例えば、本屋。友達作りの話題集めとして周りの席に聞き耳立てていた時に耳にした、クラスメイトの方が話していた最近人気の恋愛小説なんかを買つてみるのもいいか

もしれない。

例えば、少し前に見つけた喫茶店。少し前に見つけて、落ち着いた雰囲気とデザートが好みだったので、そこでゆっくり過ごすのもいい。……ああ、そういえば、その店長の娘さんがバンドをやっているという話を聞いたので、迷惑でなければ少しお話したい。

例えば、行きつけの小物屋さん。そこはよくうさぎグッズを仕入れてくれるので、もしかしたら新しい発見があるかもしれない。そういえば、そこでたまに白鷺センパイと会うことがあるのだが、今日はどうだろうか。センパイは芸能人というだけあって、色々なアイテムなどの知識を教えてくれるので、ちよつとした楽しみでもある。

そうやって考えると、意外と行ってみたい場所というのはあるもので、悩んだ末に行き着いたのが、何も考えずに歩いて気になった場所へ行くという、なんとも曖昧なもの。まあ、それはそれで楽しいのでいいのだが。

「ん……？ ああ、君っすか」

そうして歩いている途中、肩にかかる僅かな重み。肩を見れば、そこには、青い羽を持つ一羽の鳥の姿。通学途中などでよく会うこの子は、可愛いらしい声で一鳴き。

——こんにちは。そんな内容であろう声に、こちらも挨拶を返せば、頬に感じる羽毛の感触。

そうして暫く会話をしていると、何かを尋ねるような仕草と声をし始める。その声に耳を澄ますと、どうやら元気のない自分を心配してくれているらしい。

「ふふ……。ありがとうございます。でも、自分は大丈夫ですよ」

その事に感謝しつつ、優しく頭を撫でると、まだ少し心配そうな声で鳴きつつも、あの子は空へと飛び去って行く。その青い体が空へと溶けるまで見送って目に付いたのは、CDシヨップ。

「……………」

正直な話、入ろうか少し迷った。今の自分がそこで何かを得ることが出来るのかという不安と特に理由はない、だけれどどうしようもなく心惹きつけられる感覚に身を任せたいという衝動。

「……………」

そうして悩む事暫くして、今日の方針が決まった。

☆☆☆☆

——いらつしやいませー。

店員さんの声が空調の効いた空気と共に、店に入った自分を出迎える。……だがどうしようか。

「つい入っちゃいましたけど、何を見ましようか……」

いざ入ったはいいものの、いざ欲しいCDとなるとなかなか思いつかないのだ。それに、少し前に欲しかった物を買ったばかりなので、あまり余裕がないのもある。

……まあ、次に買いたい物のチェックと違って色々見てみよう。

「ほう……。ふむふむ……。あ、パスパレの皆さんのもある」

そうして見始めた店内には、最近話題のボーカロイドを使用した方々のものや、往年のアーティストのアルバム、先の白鷺センパイが所属するアイドルグループの新譜などが並んでいて、つい目移りしてしまう。

「ん……？」

そんな時、ふと目に付いたのは少し小さめのコーナー。そこには「懐かしのバンド特集」とあって、見知った名前や、初めて見たものもあって、でもとりわけ目を惹かれたのが一つの名前。

『RAZES』……？』

—— RAZES。

その名前を見て、自分はその名前を初めて見た筈なのに、まるでずっと前から知っているような、まるで今日これを手にする為に導かれて此処に来たようなそんな錯覚を感じてしまう。

——これを買わなければならない。今買わないと、きつと後悔する。

何故だろう。胸のドキドキが止まらない。朝までの鈍った思考とは違い、熱く、加速する思考が自分の頭の中を駆け巡る。

先程感じた、この店に誘われた時以上の衝動が、無意識のうちに自分の手をCDへと伸ばさせる。なんとなくだけど分かる、そこに自分の求めるものがある。きつとこのモヤモヤを吹き飛ばすような「なにか」が自分を待っているような気がする。

「あつ……」

「あらっ？」

そうして伸びた手がCDに触れようとした時に重なったもう一つの手。それに慌て、手を離してもう一つの手の主を見ると、見知った人がそこに居た。

「紗夜センパイ……?」

「花園……さん?」

そこに居たのは、自分の通う学校の風紀委員でもあり、実力派バンドとしても知られる『Roselia』のメンバーの一人でもある、氷川紗夜センパイだった。

「どうして紗夜センパイがここに……? この人たち好きなんですか?」

「いえ、そういう訳では……。花園さんこそ、この方達が好きなのですか?」

「あつ……。自分も偶然見つけただけで……」

「そう……ですか……」

「はい……」

「……………」

「……………」

き、気まずい……。会えば挨拶や軽く音楽について話す事はあるけど、余り気軽に会話をする方でもないし、どのような話をすればいいのだろうか。

……あ、そういえば、前にりみセンパイがこういう行き詰まった時の対処法を教えてくださいました。確か「仲良くなりたい相手がいれば、まずはその相手を自分のフィールドに引き込むべし」でしたっけ。少し怖くもあるけど、とにかくチャレンジしてみよう。香澄センパイだって何度も乗り越えて来たのだ、自分が出来なくてどうする。

「花園さん……？　どうかしたの？」

「あ、あのー！」

「っ！　な、なんですか……？」

「一緒に喫茶店に行きませんか！　勿論自分が全てお出しするので！」

「え、ええと……。そんな急に言われても……」

「え？　……あ、ああ！　そうですね……すいません」

——やってしまった。紗夜センパイにも用事がある事くらい、よく考えたら当たり前

だろう。緊張していたとはいえ、いきなりにも程がある。

どうしよう、なんとさえいいのかわからない。やっぱり自分はダメダメなんだ。どうして自分は――。

そんな思いばかり駆け巡って、少しづつ視界がぼやけていく。頬を伝う熱く冷たい水は、何度拭つても止まることはなく、膝が崩れそうになる。

「花園さん!? どうしたんですか!? ……とりあえず、ここでは迷惑になりますし、付いてきて下さい!」

急に泣いてしまった自分に驚いたのだろう。慌てたように自分の手を引き、周りに頭を下げる紗夜センパイに更に申し訳なきが重なって、でも、自分には俯く事しか出来なかった。

☆☆☆☆☆

「それで、どうしたんですか? 花園さん?」

あのCD店を出て暫く、自分が行こうかと迷った喫茶店の角の席。自分の前に座る紗夜センパイが問いかけてくる。その表情は難しい顔をしていて、「あの……」だの「その……」みたいな言葉しか出てこない。

「はあ……。花園さん、私は別に怒っている訳ではないので、落ち着いて下さい。ただ私は、いきなり花園さんが涙した理由を聞きたいだけです。それに今日は練習も無いので、ゆっくりでも構いませんから」

「は、はい……」

そう言う紗夜センパイの言葉に甘えて、少しづつ気持ちを落ち着けて話す。自分が上手く……というより、納得できる演奏ができなくなつた事。そのせいでポピパのメンバーの皆さんに迷惑をかけてしまつてゐる事。そういう事をゆっくりと吐き出す。

……でも、少し不思議だ。こうして話すだけなのに、気持ちが楽になつてくる。或いは、そんな自分の懺悔にも近いそれを紗夜センパイは頷きながら、しっかりと聞いてくれたからなのかもしれない。

そうして自分が話し終えると紗夜センパイは、話している間飲んでいたコーヒーの入つたカップを置いて「なるほど」と言い、自分にハンカチを渡ししてくれた。

「これをどうぞ、花園さん。まだ涙が出ますから」

「……すいません。こんな話を聞かせてしまつて」

「いいえ、そんな事無いわ。真剣に困つてゐる後輩を放つておく程薄情な人間じゃないわよ。……それに、そういつた事は私もあつたから」

「え？　そうなんですか？」

なんとというか、少し意外だと思うと同時に納得もした。あんな綺麗な音色を奏でる人がとも思っただけ、そこに行き着くまでたくさんの努力を積み、困難を乗り越えてきたのだろう。きつと今の自分みたいな状態にも何度も陥った筈だ。

「ええ。——花園さん、きつと貴女は理想の自分と今の自分の差で苦しんでるじゃないかしら？」

その言葉に息を呑んだ。ずっとモヤモヤしていた何かが明確になったというか、欠けたパズルのピースが埋まったような感情に包まれる。漸く自分は、この苦しみの正体を知れたのだ。

——ならば知りたい。紗夜センパイがどのようなようにして、この苦しみを乗り越えて来たのかを。それを知れば、自分の求める答えが分かる。

「な、なら……。教えてもらえませんか？ 自分がどうしたらいいのかを……！」

「ええ。……花園さん、貴女がギター……。いいえ、音楽を始めたきつかけを思い出せる？」

「え？ きつかけ……。ですか？ なにかこう、効率的な練習等ではなく？」

「ええ。そんな時に無理に練習しても逆効果よ。……それで思い出せるかしら？」

「音楽を始めたきつかけですか……。はい、もちろん思い出せます」

——自分が音楽を始めたきつかけ。それなら今でも思い出せる。今は遠い幼い頃に

出会った「神」との思い出は、今も自分の中にあり続けているから。

「そう……。なら大丈夫よ、花園さん。そのきつかけを大切に持ち続けている限り、貴女はきつと前に進めると思うわ」

「そう……ですか？ でももし、それでもダメだったら——」

それは、不安から出てしまった咄嗟の言葉。だって、それでダメだったら自分のきつかけは、「神」との思い出はどうなってしまうのか。

その恐怖で言いそうになったその言葉の続きを、紗夜センパイは人差し指を立て、自分の口元に寄せることでせき止めさせる。

「それ以上はいけないわよ、花園さん。そう思うのは仕方のない事かも知れない。でも、そう思ってしまうえば、もう前に進めないもの。」

……それに、それでもしもダメなら、そこはもう私じゃなくて、貴女のバンドの他のメンバーに相談するべきよ」

「相談……ですか？」

相談する。それは、自分がしようと思っても結局出来なかった事。だって、相談したらポピパの皆さんに失望されるかもしれない。その不安が自分の心を縛りつけていたから。

そんな事を思う自分を、紗夜センパイは鋭い目で見つめてくる。でも、そこに怒りと

いったものはなく、まるで自分を見透かすような、そんな瞳。

「ええ。強く絆を結んだのなら、どんな些細な事でも力になってくれる……きつと、仲間とはそういうものでしょう？ ……それとも、貴女達『Poppin, Party』の他のメンバーはそこまで薄情なのかしら？」

「っ！ そんなこと……そんなことありません！ 『Poppin, Party』の皆さんはとて優しくて、尊敬できる人達です！ ……いくら紗夜センパイでもポピパの皆さんの事を悪く言わないでください！」

その紗夜センパイの言葉に、頭にきてしまい、テーブルに手をつけて声を荒げてしまふ。でも、どうしても『Poppin, Party』の皆さんの事を悪く言われるのが、いくら相談に乗ってくれた紗夜センパイでも許せなかった。

「……そう。安心したわ」

でも、そんな自分の言葉に、紗夜センパイは何故か穏やかな笑みを浮かべ、優しく自分の頭を撫でる事で返してきました。

そうして自分の髪を崩さないように触れられる優しい感触に戸惑う自分に、紗夜センパイは再び口を開いた。

「そうやって自信持つて言えるなら、きつと大丈夫よ。……それと、最後に一つだけ。こんな時、仲間同士でぶつかりあったりするかも知れない。でも、そこで焦らず、貴女達

のペースで進む事。それがきつと一番大事な事だと思わね。……分かったかしら？」

紗夜センパイは自分の頭から手を離し、そう言つて微笑む。

そうか。紗夜センパイは、いや『Roselia』は、そうやって乗り越えてきたんだ。紗夜センパイの顔を見れば分かる。そこには強い絆があるんだ。

——でも、絆なら自分達も負けてなんかない。例え実力は遠くとも、自分達が出会い、育んできたこの音楽^音だけは、誰にも負けるつもりはない。

「……何か、掴めたかしら？」

「はい！ ありがとうございました！ 紗夜センパイ！ ……それと、ご迷惑おけてしてすいません。何か今度自分に手伝える事があればなんでも言つて下さい！」

「……さつきも言つたけど、別にいいわ。……ああ、でもそうね、一つだけお願いしてもいいかしら？」

「はい！ なんででしょうか！」

そう言つた自分に、紗夜センパイが手渡してきたのは一つのCD。なんだろうと受け取つて見れば、それは先程自分が手を伸ばしていた物だった。

「あの……。紗夜センパイ、これは……？」

「……これは恥ずかしい話なのですが。このCD、買ったのはいいものの、家に既にあるのを思い出しまして、花園さんが欲しそうにしていたので、よければと思ひまして……」

——ああ、それはきつと嘘だろう。だって、自分の手を引いてCD店を出る間際、紗夜センパイがこれを買っているのを視界がぼやけながらも見たのだ。でも、それを突っ込んでしまえば、それは紗夜センパイの心遣いを無下にすることになる。なら、ここで返す答えは礼以外にない。

「ありがとうございます……！ あつ、でもお代は……」

「私が間違つて買つてしまったものですし、別にいいですよ。……でも、そうね。そこまでお礼がしたいのなら、今度のライブ、貴女らしいギターを聞かせてもらえるかしら？」

「自分らしいギター……ですか？」

「ええ、今回の事で貴女が掴んだもの、それを次のライブで見せてくれれば、私はそれで満足よ」

「は、はい……」

——それじゃあ、楽しみにしているわ。用事があるから、私はもう行くけど、頑張つてね、花園さん。

そう言つて、最後に自分の肩に手を置いて、紗夜センパイは店を出て行く。その感触にしばらく浸り、自分も出ようと思つた時、伝票が無いのに気づく。店員さんに聞けば、紗夜センパイがもうすでに支払っているとのこと。

「ああ、やっぱり敵わないなあ」

——よし、次の自分の目標が決まった。今度は少しでも、紗夜センパイのこの優しさに報いれるようになろう。その為には、自分のきっかけをもっと大切にしよう。

夕暮れの近づいた空。そこに、自分は小さく誓いを立てるのでした。

☆☆☆☆

夕暮れの街を、少女は歩く。ほんの少し俯いた視線の先の手に握るのは、とあるバンドのCD。その曲名等を見ながら、少女は曲がり角に差し掛かる。

「あいたつ」

「っ……おっと」

いざ曲がろうとしたその時に、少女の身体に掛かる衝撃。どうやら、誰かとぶつかってしまっただけらしい。尻餅をつきながら見上げた視線の先にあるのは、逆光で顔のよく見えないものの、少しくたびれたスーツを着た、少し老いた男性。

「すまねえな、嬢ちゃん。前を見てなかった。大丈夫かい？」

「……………？ いえ、自分も前を見てなかったので……………。すみません」

その男性の声に少女は少し引っかかる。遠く、何処かで聞いたような、違和感を抱きつつ、少女は差し伸ばされた男性の手を取ろうとした時、男性の視線が別の所にあるのに気づく。その視線の先には、少女がぶつかった際に落としたCD。

「あの……………」

その姿を不思議に思った少女が声をかければ、男性は慌てたように謝りつつ、少女を立ち上がらせる。そして、落としたCDを拾い上げると、それをほんの少し懐かしげに、けれど悲しそうに少しの間見つめて、少女に手渡す。

「ほらよ、嬢ちゃん。良かったな、傷は無いみたいだぜ。……って、ぶつかつた俺が言うのも可笑しいか。改めて悪かつたな」

「あ、ありがとうございます……。って、それはいいんですが……。あの、オジサンはどうしてそんな悲しそうな顔を？」

それを彼女が聞いたのは、ただの好奇心だった。だが、まるで誰かが死んでしまったかのような顔をしていた男性は、その問いに対し、顔に笑みを浮かべる事で返す。

「いや……。なんでもないさ。ただ、この世界で一番だつて思つてたバンドがこれだな。それが解散しちまつた時の事を思い出しただけさ」

「解散……ですか……」

「なんだ、知らなかつたのかい。嬢ちゃん」

「は、はい。今日初めて手に入れたので……。そういつたのは全然」

少女の言葉に意外そうな顔をした男性は、二、三度「そうか……」と呟き、口を開く。「なら、これはおススメだぜ。なんたつて、俺が思う最高のギタリストのCDだからな」

「へえ、そうなんですか？」

そう少女が問うと、男性は嬉しそうにそのギターリストの魅力を語り始める。

弾き方がどうか、ライブでのハプオーマンスについて、果ては人柄など、まるで実際に見てきたかのように語る男性に、少女は少し疑問を抱きつつも、不思議な懐かしさから、相槌を打ちつつ男性の話に耳を傾けていた。

そうして少しの時間が過ぎた頃、男の電話から着信音が鳴る。「悪い」そう一言告げ、少し離れた場所で電話に出た男性は、話を終えると彼女の元へ戻り、手を合わせる。

「すまねえ。人と会う約束してるのすつかり忘れちまつた。ありがとうな、オジサンの昔話に付き合ってくれて」

「いえ、とても為になる話を聞けて楽しかったつす。ありがとうございました」

「はは、そう言つて貰えるとありがたいな。……それじゃあ、オジサンはここで」

——じゃあな、坊主。俺たちの夢、撃ち抜いてくれてありがとうよ。

お互いが歩き始めた瞬間。最後に言い残した男性の言葉に、少女は足を止めて振り返る。だつて、少女を「坊主」と呼ぶのは、ずっと自身がもう一度会いたいと、そう思つていた人物以外ないのだから。

「待つて——」

しかし、振り向いた先にあるのは雑踏のみで、先程までのくたびれたスーツの姿はもう見えなくなつていた。

——漸く会う事が出来たのに。もっと、もっとあの人と話したかった。

「……………」

そうしてまた俯いた視線の先にあるのは、先程と同じCD。しかし、一つだけ違うのが、ジャケットの裏面に貼られた一枚のメモ。

「ふふ……。不器用すぎますよ」

それを読み、少女はまったく不器用な人だと笑い、再び歩き始める。夕暮れが過ぎ、星の出始めた空の下。その姿はもう、俯いてなどはいなかった。

☆☆☆☆

その日の夜。少女は自身の「きっかけ」の場所でギターを鳴らし、夢を撃ち抜く歌を歌う。

天には輝く星々が見守り、風は少女の歌声を、遠い何処に届けるように優しく運んでいった。

「もしも」をこえて、いま。

とある日の質屋「流星堂」。その一人娘である市ヶ谷有咲はその日、自身の所属するバンドの練習もなく、暇を持て余していたので自宅であるこの店の店番の手伝いをしていた。

「……」

カウンターに肘をつき、飼い猫兼この店の二匹のマスコットの片割れであるザンジと戯れる有咲。猫じやらしを揺らす彼女の視線の向こうにあるのは、つい先ほど訪れた珍客達の姿。

「ねえ見てりんりん！ こっちにこんなのもあつたよ！」

「あこちゃん……見て……。こっちにも……こんなのが」

丸いピンクの星の戦士のソフトを手に持ち、連れ立った少女に手招きする紫色の髪の少女——宇田川あこ。その呼びかけに答えつつ、自身の手に持った赤い帽子の土管を進む配管工のソフトの方に手招きする黒髪の少女——白金燐子。

「はえー……」

様々なレトロゲームに目を輝かせる二人というのは、「Reselia」に厳格なイメー

ジがあつた有咲にとっては少し意外なもので。いや、あこについては何となくわからなくもないが、燐子についてはゲームというより本を読むイメージが強かつたので特に意外だつた。

（あー……でもMCとかで仲良さそうだつたし、白金先輩も案外そういうところもあるのかも……つて私は何を考察しているのかしら）

「ねえ、有咲さん！ 少しいいですか？」

「え？ ああ、うん。どうしたの？」

ボーつとあこは燐子の関係について考えていた有咲は、近づいてきたあこの声に驚きつつも笑顔で返す。あこはその様子に不審がりつつも、その手のレトロゲームを持ちながら、有咲に問いかける。

「あの、ここにあるゲームってどれくらいあるんですか？ あこ、ゲームシヨップ以外でこんなにレトロゲーム見つけたの初めてで……」

ああ、なるほど。有咲はあこの問いに納得する。確かに他の質屋にゲームも置いてないこともないが、ここまでのものはあまりないだろう。それに、ここまでゲームがあるのも、ここに置かれているものは本来は有咲の私物であり、それをキーボード購入資金のために置いていたのだ。

「えつと……。ちよつと待つててね……」

（さて、あとどれくらい残つてたかしら……。確かあの人が買つてくれたの以外だと倉庫にもあるから……）

以前親切なオニーサンに購入されたものを除きつつ、指折りしながら数を考える有咲。その有咲の様子を見ながらあこと燐子は小声で話す。

「有咲さん……すごい考えてる」

「うん……あこちゃん、そつとしといてあげよう？」

そうして有咲が考えることしばらく。おおよその数をまとめた有咲は二人の待つ場所に向かう。

「おまたせ、待たせちゃった？ ……はい、これが今店に並んでる分」

「いいえ……こちらこそご迷惑を……」

「別に大丈夫ですよ。それで、ここにあるゲーム以外にもまだ倉庫にあるけど……見てみるっ？」

「いいんですか!？」

「うん。私も丁度倉庫から品出しするところだったし、そのついでよ。……それじゃあザンジ、店番よろしくね」

そうして有咲が示した数。その数に燐子とあこの目の輝きが一層強くなり、共に頷

く。その自身の予想通りの反応に、同類を見つけた自分の顔が少しにやにやしそうになるのを抑えつつ、彼女達は倉庫へと足を進める。

——にやあ。

この店の頼れる店番は、彼女の言葉に応えるように一声あげ、去りゆくその背を見えなくなるまで見届けていた。

「……はい、着きました。わかってると思いますけど、ここにあるのも売り物なので気を付けて触ってくださいね」

「うわあ……」

「すごい……」

そうしてたどり着いたのは、いつも有咲たちの使う蔵の近くの倉庫。様々な物ひしめき合うその一角に置かれたゲーム機のハードの数々に二人は目を輝かせ、感嘆の声を漏らす。

(……二人とも、目がキラキラしてるわね。そういうところあるあたり、やつぱりゲーマーっぽいわ……)

そうしてゲーム機を眺め始める二人を傍目に、有咲は店頭に出す予定の手近にあったスーパーでファミリーなコンピュータを手にして、二人が来店してからずっと気になっ

ていたことを問いかける。

「そういえば、二人はどうしてこの事を知ったんですか？」

「え？ どこで……ですか？」

「はい。正直な話、わざわざうちに来るのって特別な事情を持った人が多めですし。だからどうして知ったのか気なってます」

「ああ、そう言われれば確かに！ ……どうしようりんりん。これ、言っちゃっても大丈夫かな……」

「うん。多分大丈夫だと思うよ。市ヶ谷さんも多分その辺りの事情には詳しいだろうし……」

それはある意味当然ともいえる有咲の問いかけ。それに二人が話し合うのを見て、有咲はもしかしたら聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれないと思い、別に答えにくいなら答えなくてもいいと言うが、二人はそうではないと言い、ゆっくりではあるが話し始める。

『レトロゲーム……ですか？』

それは二人が流星堂を訪れる数日前のこと。バンドの練習も終わり、自宅に帰った二人は共通の趣味であるオンラインゲームにログインしていた。そうしてゲーム内で合

流し、暫くデイリークエストや必要武器の素材集めを周回していた二人は、フレンド欄に最近ログインのなかったフレンドがログインしているのに気付いた。

その人とはオフ会で会う程度には仲の良いフレンドであったこともあり、すぐにチャットで連絡をして久しぶりだと声をかけ、ログインの減った理由を聞いてみた返答がこれだった。

『ああ、偶然行った店でね。まさか質屋にあそこまで掘り出し物があるとは思わなかったよ……。それで懐かしくてやりこんじゃってね……』

『へえ……。あこ、レトロゲーってあまりやったことがないですよね……。古くてもDSくらいしか……。』

『そっか……。DSか……。もうあれも古いに入るのか。そっか……。』

『あつ……。と、とりあえずクエスト行きますか……。？』

そうしてチャットの文面からも分かる程に気落ちした様子の子のそのフレンドと気分転換にクエストに行った二人。

しかし、あこはどうしてもフレンドの言うレトロゲーが気になり、なかなかクエストに集中できずに、スキルの誤爆を三回を超えた辺りでフレンドからチャットが飛んできた。

『あこ姫さん、大丈夫ですか。少しスキル誤爆多い気がする……。』

『あこちゃん……大丈夫？』

『ごめんなさい……。ちよつとさっきの話が気になって……』

『ああ、なるほど……。どうしますRINRINさん。私は大丈夫ですけど……』

『ごめんなさい……。私も大丈夫です。すいません、付き合ってもらっているのに』

『大丈夫だよ。それじゃあまらずは——』

「……それで、その人の話に出て来たのがここだったと」

「はい……。突然すいませんでした。」

「いや、それは別に構わないですけど……。いやあ……。まさか白金先輩がオンラインゲームとはねえ。それは予想外だったわ」

時間にして十五分程度続いたその話。それを聞き終えた有咲はふとため息を漏らす。正直なところ、彼女は二人がゲームマーダとは感じていたものの、それはあくまでオフラインでのゲーム、あるいはソーシャルゲームの類かと思っていたので、二人のプレイするゲームがまさかMORPGだとは思わなかった。

「そ、そんなに意外……ですか……？」

「あ、いえ！ 別にそういう訳じゃないんですけど……。なんというか、そういったものより本とか読んでるイメージがあつて……」

「ああ……。確かに家や学校では本を読むことが多いので……。あまり間違いでは

……。なんとというか……すいません……」

「いえいえ！ 白金先輩が謝る事じゃないのでやめてください！ むしろこちらが申し訳ないというか……」

その有咲の様子に燐子は謝罪するが、燐子の雰囲気のせいか逆に申し訳なくなつてしまった有咲は手を振って謝罪を止めさせ、一息入れようと壁に掛けられた時計を見やる。そうして見上げた視線の先のチクタクと無機質な音を奏でるそれは、もうすでに十五時に差し掛かろうとしていた。

「って、もうこんな時間ですか……。どうですか、お茶をお出ししましょうか？」

「えっ……。でも流石に……。迷惑では……」

「全然大丈夫ですよ！ お二人はお客さんですし。それに、変なことを言ってしまったお詫びといたしますか……」

「そんな……。こちらも全然気にしてないのに……。でも、そういう事でしたら……。いいよね、あこちゃん。……。あこちゃん？」

暫く続いた二人の遠慮のぶつかり合い。その果てに根負けした燐子はかあに声を掛けるが、あこは置かれたいくつかのゲームを見るのに集中していたのか、もう一度声をかけられて漸く気づく。

「ん？ どうしたのりんりん。」

「あのね……市ヶ谷さんがお茶出してくれるって……。だから呼んだんだけど……」

「あつ、ごめんりんりん、有咲さん……。ちよつと見るのに集中しちゃつてて」

「ううん……。大丈夫……。お父さんにいっぱいお話したいもんね……」

「ああ、うん。私もいいけど……」

（お父さん？ そういえばなんでうちに来たかは聞いたけど、宇田川さんがなんでレトロゲーに興味を持ったのかは知らないのよねえ。ま、聞いたら聞けばいいかしら）

あこの口から出た「お父さん」というワード。有咲はそれが気になったが、先に一息つこうと客室と向かった。

燐子と手にゲームを抱えたあこの二人が帰宅し、閉店した後の流星堂。有咲はリビングから聞こえる祖母の夕飯の支度の音を聞きつつ、溜息を漏らしながらカウンターの上に陣取るザンジに触れる。そうして思い出すのは、あこから聞いたゲームを探しに来た理由。

——あこ曰く。幼い頃に彼女は父のやっているゲームを見ていたらしい。しかし、最近になり彼女の父が徐々にプレイしようとしたところ、いつかの大掃除か何かで紛失してしまつたらしい。

そのせいか元氣のない父に誕生日にサプライズで送りたいかかったのだという。

（それにしても”お父さん”かあ……）

あこの話を振り返りながら、有咲はふと思う。

——もしも。もしも父がまだ生きていたのなら、今はどんな風に生きていたのか。寂しさにも似た感情を抱きながら、有咲はそんな「もしも」の未来予想をする。

——もしも父が生きていたなら、休みの日は一緒にゲームをしていたのかもしれない。

——もしも父が生きていたなら、今もライブで父のギターを弾く姿を見ていたのかもしれない。

——もしも父が生きていたなら、いつか語っていた宇宙一熱いロック・フェスティバルを開催していたのかもかもしれない。

（……でも、違う。だって、そんな「もしも」の世界なら——）

思い浮かんだ「もしも」の数々。それを有咲は打ち払う。きつとその世界はその世界で幸せなのだろう。だけどその世界では、この世界にあるモノがありはしない。

——だってそんな世界なら。あの下を向いていた未来の星のカリスマに出会う事なんてきつと無かつた筈だから。

思い返すのは運命の始まった日。父の命日に飾っていた父の遺した武器（紅いランダムスター）に釣られた下を向いていた少女との出会い。そこから紡いだ音楽（キズナ）の軌跡。

それらは全て「もしも」じゃない過去が積み重なった結果で。だからこそ自分達は「今」を生きて行くのだと。それに、父はきつと見守ってくれていると、有咲は信じている。

「……よしっ！」

リビングの方から聞こえる祖母の声に返事を返し、有咲はパチンと自ら手を叩きカウンターから立ち上がる。リビングへと向かう途中に口ずさむのは、父の遺したメモデイ。

——ほら、いつだって夢の鼓動はすぐそこに。

星のない夜。太陽と月は歌う。

八月が足音が近づいてきた七月中旬の日の夜。私、市ヶ谷有咲は自宅の蔵の中のソファでとある人物を待つていた。蔵には現在、私と飼ひ猫二匹しかおらず、カチカチと小さく時計の針が刻まれる音だけが響くだけ。けれどその音がよりこの蔵の静けさを強調している気がした。時計を見れば時刻は20時54分、約束の時間まであと少し。「……それにしても静かね。さっきはあんなに騒がしかったのに」

そうして静かに過ぎていく時間の中で、私はそう言葉を吐き出し蔵の中を見渡す。そこに置かれているのは私のキーボードと待ち人のドラムの他にいくつかのアンプだけで、数時間前の騒がしさなんてものは欠片もなく、ただ機材たちが私を見返すばかり。そして私は瞳を閉じてその数時間前の騒がしさに思いを馳せる。

——そう考えると、私は随分とあの子たちの騒がしさに馴染んだものね。

一年近くまでは閉じられた私の城だったこの蔵。それが今では楽器にパーティーサイズのお菓子に勝手に積まれた忍者雑誌が置かれ、様々な色に染まっていた。

まあ、雑誌は後で縛ってあのおバカに返却するとして、ここがこんなに騒がしくなるとはかすみんを招いた当時の私も思わなかっただろう。けれど、どこか心地よさを覚え

る空間の中で膝やソファに乗っている飼い猫たちと戯れながら時間を過ごし、ちらりと時計を見やると時刻は既に21時を過ぎており、待ち人との約束の時間を過ぎ去つていた。

「……今日は無理かしらね」

そのことを確認した私の口から漏れたのは、小さな溜息とそんな言葉で。諦めた言葉の反面、心の隅でどこか寂しさにも似た感情を感じながらも、時間だからと仕方ないと割り切り母屋の方に戻ろうかと思いつのを諦めて部屋を消そうとした私を引き留めたのは、我が家の飼い猫のザンジとバルだった。

「……ザンジ？ それにバルも。どうしたの？」

電気を消すために立ち上がろうとした矢先、私の進路塞ぐように立ちはだかり動かなくなつた愛猫たちに声を掛けても聞こえてきたのは沈黙とうなり声だけで。無理やりどかすわけにもいかず困り果てた私の耳に届いたのは、蔵の扉を叩く音だった。

「わっ、はーい！ ちょっと待ってー！」

ようやくどういてくれた愛猫二匹の脇を通り、私は蔵の扉を開くと、そこにいたのは薄い桃色のかかった茶髪をした待ち人たる少女——山吹沙綾が息を切らせてそこに立っていた。彼女は急いで走ってきたのか、頬に汗を滴らせながら膝に手を当てて私を見上げながら問いかけてきた。

「ご、ごめん。遅れちゃった……。時間、セーフ？」

「いや、そこはまあいいけど……。大丈夫？」

大丈夫、大丈夫。家の手伝いで鍛えてるから。なんてことを言う彼女にタオルを渡そうとタンスを開きながらふと私は考える。思えば、私は出会った時から目の前の彼女に対して軽い苦手意識のようなものを持っていた気がする。

「わっ。ごめんね市ヶ谷さん、明日洗って返すから……！」

「ん、いいわよ。別に無理しなくても、また来れる時で。あんたも忙しいでしょ？」

タオルで顔を拭きながら、ありがとうとこちらに笑顔を向ける彼女。その笑顔はとても朗らかで、太陽のように明るいそれが、私の心を波立たせる。

多分、それが苦手意識の一つではあるのだと思う。私の笑顔はきつと人に冷たい印象を与えるものだから、暖かさを感じさせる彼女の笑顔がちよつと遠いものを感じてしまう。

「ほんとにごめんね。市ヶ谷さん……」

「だから、タオルくらい全然大丈夫だって……」

「いや、タオルのこともだけど……。ほら、私の練習にも付き合ってもらってるし……」

「そつちのことならもつと大丈夫よ。なんとたって私はポピパのマナージャーでもあるんだからね。メンバーの練習に付き合うくらい当然でしょ」

そんなことを話しているうち、ふと私は彼女がどうしてこの夜の練習を始めたのか気になった。彼女がポピパの仲間になったのは七月七日。全体の練習については定時制の方に通っている彼女のことを考えて夏休みにすることにはなったが、その間の練習として本人の希望でこの夜の二人だけの練習をすることになったけれど、その理由を本人から聞いたことがなかった。

「ねえ、沙綾」

「ん？ どうしたの、市ヶ谷さん」

「そういえばなんだけど、貴女がこの練習始めた理由ってなんだったの？ 別にあの子達なら待つててくれたでしょ？」

「それは……」

「いいから。どうせここには二人しかいないんだし、さっさと吐いちゃいなさい」

汗を拭き終えドラムスローンに座って練習の準備をしていた彼女にそれを問うと、彼女は言いづらそうに口をモゴモゴさせる。その様子が何故か気に食わなくて、ちよつとだけ問い詰めると、彼女は何かを決意したのか、静かに話し始めた。

「いやあ。別に深い理由とかはないんだけどね……。久しぶりにちゃんとドラム叩くから普通に勘を取り戻したいのと……やっぱり、香澄ちゃんに失望されたくないからかな」

彼女の言葉に、はあ……と思ったより気の抜けた声が出た。だってそんなことであの子、かすみんが貴女に失望なんてするわけがないのに。むしろ貴女が這い上がるまで背中を押し続けるだろうに。

「別にあの子はそんなこと……」

しないでしょと、そう言いかけて止めた。だって、きつとそれで貴女は納得しないでしよう。そのことは彼女から向けられる不信感の混じった目がなにも言わずとも答えてくれる。その目は私のことを信じてない目ではなく、きつと自分自身を信じきれていない目だと、似たような目をしている女の子を既に知っている私には分かる。

……でも、ちよつと安心した。かすみんや本人から聞いてはいたが、気丈で明るい彼女の奥底にある弱さとも言える部分を直に知ることが出来たからだろうか。それはほんの少し違う気もする。何故、私は彼女の弱音に安心感を得たのだろうか。

「あー……そういうことね」

「え、どうしたの？ 市ヶ谷さん」

「いや、こつちの話よ。……というか、私から話振っておいてなんだけどそろそろ練習始めなきや。あんまり時間もないんだし」

「あつ、それもそうだね。じゃあ『Yes! BanG | Dream!』からでいい？」

「ん、オツケー。録画も回すけど沙綾も私の演奏に気になることがあったら言ってね。」

私の練習でもあるから」

「はい。じゃあいくよ」

そうして録画の準備をして、彼女のカウントでキーボードを弾きながら頭の片隅でぼんやりと考える。——なんとなく理解した。多分、私が抱く彼女への苦手意識の正体は、正反対の存在に対する者への羨望とそれに対する恐怖に近いものなんだと思う。そして、先程の安心感とは正反対の存在という認識がほんの少し薄れたからだと思う。

暖かく、朗らかな太陽のような笑顔の彼女に対して、冷たく、ゾツとさせるらしい月のような私の笑顔。

大多数の人についても平気だが深い関係の相手に一步引く彼女に対して、あまり多くの人と接するのが苦手だが深い関係の相手に一步踏み出せる私。

かすみん星に見出だされた彼女と、かすみん星を見出だした私。

……そして、まだ生きている彼女の父親と、もういない私の父親。反対となる部分はざっと挙げればこんなものだろう。それが羨望の部分。

別に、父親のこととやかやく言うつもりはない。簡単にだが彼女の事情も聞いているし、私は父親の死を受け入れている。

「でも、それでも……」

父親の生きている彼女がほんのちよつとだけ、羨ましくなってしまうのだ。もし、お

父さんが病に倒れても這い上がることができたのなら……と、そう思ってしまったのだ。

そして、その事を私は恐れている。今は大丈夫だが、いつかの時、私がこの思いに耐えきれなくなってしまうたら。その時の私は彼女に酷いことを言ってしまうのではないかと恐れていたのだ。

でも、今はほんの少し大丈夫な気がする。それはきつと、私の恐れが彼女の恐れと似た色をしているのだと知ったから。私と彼女は全てが反対なんかじゃない。それが分かったのなら、これを繰り返せばきつと私の恐れもいつか解けるだろう。別に感情を押し殺したりはしないけど、私の不和が原因でこのバンドに悪影響を与えるのは、すごく嫌だ。

第一、メンバー間のいざこざで解散危機なんて、アニメやゲームのありがちな鬱展開や殺伐とした世界だけでいい。そんなのはかすみ^星の物語^話には似合わないし、させはしない。その為なら私の羨望も恐怖も、いくらだって解いてみせる。

——そうして気がついたら演奏は終わっていて。顔を上げると彼女……沙綾が心配そうな顔を浮かべていた。

「お疲れ市ヶ谷さん。……すごい集中してたね、私の何度も声かけたのに」

「はあ……はあ……。ごめん沙綾、もう一回やっていい？ ちよつと考え事してた」

「え？ 私はいいいけど……。大丈夫？ なんか大事な事？」

「ん、まあそうねえ……」

そこで言葉を切つて沙綾の顔をじつと見る。……そこには最初の頃のような苦手意識は、あまりない。

「いや、やつぱりなんでもないわ」

「え？　そこで切られると気になつちやうんだけど！　ねえ、市ヶ谷さん、私変なところあつた!？」

「ああ、ごめんごめん。そういうことじゃなくて……そうね、じゃあこうしましょう」

そう言つて私は沙綾にピンと指を指して言う。

——今度会う時、その市ヶ谷さんつて言うの禁止ね。ちゃんと詰まらず名前で呼べたら考えてた教えてあげる。

ここの私が言うのと、沙綾は呆気にとられたような顔をして、問いを投げてきた。

「え、それだけでいいの?」

「ええ、一回試しにやってみなさい。ほら」

「えつと……あり、さ……ちゃん?」

私が促すと、沙綾は少し照れくさそうな顔をしながら戸惑いを含んだ声で私の名前を呼ぶ。それがどうにもむず痒いような気がして、こつちまで照れそうになってしまう。そんな私に唇を尖らせながら沙綾は抗議の声をあげる。

「ねー……！　自分で言わせておいて照れないでよー」

「べ、別にいいじゃない……！　ほら、練習再開するわよー！」

あつ、横暴だー！　なんていう沙綾の声を聞かない振りをしてながら再びキーボードの前に立つ。心はもう軽く、今度はしつかり集中して演奏できる気がした。

そして、いくつかの時間が流れた蔵の中。そこには五人の女性がいた。掃除をしているらしい女性達は、各々雑巾がけや掃き掃除、掃除機をかけた部屋の中の仕分けを行っていた。

「あれ、これなんだろう……？」

その中の一人、物の仕分けをしていた猫のような髪型をした女性は、手に取った一つのDVDケースを前に首を傾げていた。白い無地にマジックで『A&S　7／14』と書かれたそれは、女性の記憶には無いものだった。

「あつ、これ懐かしいー！」

その様子を見てか、猫のような髪型の女性の横で同じ作業をしていた薄い桃色のか

かった茶髪の女性がそのDVDケースを覗きこみ、声をあげる。茶髪の女性は瞳に懐かしさを浮かべながら、DVDケースを手に取りまじまじと眺めていた。

「沙綾ちゃん、これなにか知ってるの？」

「うん、知ってるよ。……あ、そっか。この時香澄ちゃん達いなかったもんね。おい、有咲ー！」

「んー？　なんか困るものでもあったー？」

沙綾と呼ばれた女性が香澄という女性の問いに答えると、少し離れた場所で掃き掃除をしていた女性に声をかけ、その声に有咲と呼ばれたクリーム色に近い髪の女性が近づいて、その手の中のケースを見ると嫌なものを見たかのように顔を歪める。

「うっわ……それそこにあったのね。最近見てないからどこいったかと思った」

「私もー。てつきり有咲が処分したかと思ってた」

「そんなわけないじゃない。あれでも一応私達の活動記録だし……というか沙綾はコピー持ってるでしょ」

「あ、バレた？」

「バレるに決まってるでしょ……全く」

思い出の品なのか、DVDケースを囲みながら軽口を叩き合う沙綾と有咲。その話についていけない香澄はおずおずと手を挙げながら、二人に声をかける。

「えっと……それで、そのDVDってなんなの？」

「ああ、ごめんかすみん。って言ってもそんなに大したものじゃないんだけどね」

「そうそう。ほら、ポピパが出来た時、二人で練習してた時のやつだよ」

「あ、その時のなんだあ……ねえ、これ後で見てもいい？」

自分がいなくて二人。その様子が気になった香澄は二人にそう問いかける。

その問いに有咲は顔をげんなりさせ、沙綾は平然と答えた。

「え、私はまあいいけど……見てもそんなに面白くないわよ」

「私もいいよ。……あつ、そうだ香澄ちゃん。そのDVD、有咲のレアな表情あるよー」

「はあ!? ちよつと沙綾、なに言ってる……」

「有咲ちゃんのレアな表情!? 見たい!」

「あ、ちよ……かすみん!」

突如とした沙綾の言葉。それに目を輝かせながら、分かりやすいところに置いてくるね! と言いつつ、その場を離れた香澄をゆつくり追いながら、唇を尖らせた有咲は口を開く。

「いきなりびつくりするじゃない……あの録画止め忘れてたやつのことでしょ」

「そうそう。あの時のお返し」

「よくもまあ覚えてるわね……」

そう言いながら小さく溜息をつく有咲を横目にしながら、沙綾は兼ねてから疑問を投げかける。

「ねえ、有咲」

「ん、なに？」

「あの時の隠し事、結局なんだったの？」

その問いに有咲は少し驚いたような、或いは意外そうな顔をして口を開いた。

「……そこまで覚えてたの」

「ううん、思い出したのはさつき。でも、ちよつと気になって」

沙綾がそう言うと、有咲は暫く考え込むような仕草をした後、首を振って答える。

「……ごめん、なんだったか忘れちゃった」

「そう。……大丈夫？」

「ええ、それより行きましよ。こうなるとあの子たちは休憩しちゃうでしょうし」

「あはは、そうだね。じゃ、行こっか」

小さく笑い合いながら、二人は歩く。晴れやかなその表情に、一欠片の曇りはなかった。